

宝満山のカガシン



作・まえだ つとむ

写真イラスト・宝満山ヒキガエルを守る会

小さなカエルたちが、宝満山の山道をぴよん、ぴよんと登っていきます。

パクリと食べようと狙っているのは、体がまだ三〇cmもない、ヘビの子どものカガシンです。赤、白、黒の模様でついたヤマカガシという種類です。この前お母さんがカラスに食べられて、ひとりで生きています。

しばらくはめそめそしていたカガシンでしたが、やっと泣かないようになり、今日も頑張ってカエルを捕まえようと頑張っていました。しかし、なかなか捕まえられません。何度飛びかかっても、ひよい、ひよいと今日も逃げられてしまいます。

「ほら、よく見てごらん。カエルたちはみんな山の上の方に向かっているから、少し上の方に飛びかかれれば捕まえられるのよ」

お母さんに教えてもらったことを思い出し、カガシンはもう一度少し上に飛びつき、やっとカエルを捕まえました。ぺこぺこのお腹を少し満たしたカガシンの前を、一心に山の上へと向かう小さなカエルたちが通り過ぎていきます。

「どうしてカエルたちは、みんな山の上に向かって進んでいくの?」

お母さんに聞いたことを思い出します。お母さんは笑って、

「そうねえ、上の方で家族が待っているのかな。それとも山の上に極楽浄土があるのかな」

「ゴクラクジョウドって？」

「死んでから行く天国のことよ。花園に囲まれて、食べものにも何にも困らない楽園」

「そんな良いところだったら、今すぐにでも行きたいなあ」

「まだまだここでごんばらなきゃ。一所懸命生きてたら行けるところなのよ」

お母さんは今頃、ゴクラクジョウドで楽しく過ごしているんだ。いいなあ。カガシンはお母さん pensando 思っ 胸が苦しくなるたびにいつもそう思っていました。

ザッ、ザッという音が聞こえ、ハツとしたカガシンは石のかげに身を隠します。人間の姿が見えてきました。

「宝満山で一番不思議なのは人間たちね。ふうふう言いながら頂上まで登って、すぐまた降りてくる。いったい何を考えているんだろうねえ」

用心深く身をひそめながら、またお母さんとの会話を思い出します。こうしてお母さんと心の中で会話したり思い出したりしながら、今は生きています。

「そんな中でもわからないのは、ただカエルをじっと見つめている人間たちね。捕まえて食べるわけ

でもなくて、ただ見てるだけ」

そんな会話を思い出して、くすっと笑ったカガシンは、ガサリと音を立ててしまいました。

「へビがいるぞ、ヤマカガシだ」

人間に気づかれました。

「子供だな、体も小さい。赤、白、黒の模様が気持ち悪いなあ」

「毒を持っているから、殺したほうがいいんじゃないか」

持っていた棒を振り上げます。カガシンを目をつぶり覚悟しました。

「まあ、ほっとけ。先に行くぞ」

そう言って離れていき、カガシンはほっと胸をなでおろしました。人間にも見つからないように、とお母さんから教えられていたので、カガシンは注意深く過ごしていましたが、ばったりと出会ってしまうことがありました。その時はいつも、悲鳴を上げていやがられたり、石を投げたりしたので、人間にはあまり好かれていないんだなと感じていました。

「人間はなぜぼくたちをあんなにイヤがったり、怖がったりするの？ 何も悪いことしてないのに」
落ち葉の中に姿を隠したまま、またカガシンはお母さんのことを思い出します。

「きっと体の模様が嫌いなものよ」

「それだけ？ 赤白黒でカッ」いいのに」

「好みはそれぞれ」

「自分たちだって、赤やら青やら黄色やらの洋服を着ているくせに」

「気にしないの。身をひそめてしばらくがまんしていればいいだけ」

お母さんは気にしない様子で隠れながら、なんだかいつも悲しそうでした。

「さあさあ、そんなことは気にせずいっぱい食べるのよ」

そんなお母さんの言葉を思い浮かべ、人間がいなくなったのを確認すると、

「カラスに負けないようにはやく大きくなるぞ」

カガシンは目の前にやってきたカエルに飛びかかり、ぱくりと上手に飲み込みました。

やっとお腹を満たしたカガシンは、山の岩場にある洞くつへと戻っていきましました。洞くつの中は広く、昔はお坊さんの修行の場になっていました。中には小さな池があり、もっと奥には、誰がいつ隠したのかピカピカ光る宝石やお金もありました。

池を通りすぎて、岩肌が平らになったところがカガシンの住まいでした。そこには、亡くなったお

母さんが脱皮した時の抜け殻も残っていました。

お母さんの匂いがまだ残る抜け殻に体を寄せて、カガシンがうとうとしていたその時、ドスン、と大きな音をたてて洞くつの中に何かが落ちてきました。びっくりして身をひそめたカガシンは、音の方をこわごわと見つめました。

「いたたっ」

落ちてきたのは、カメラを片手にいつも宝満山をうろうろしているよく見る人間でした。しばらくして、ぼうっと明かりがともりました。

「洞くつに落ちたのか。こんなところが宝満山にあるなんて知らなかったな。いたたっ、でも骨折はしていないようだ」

そう言いながら明かりで洞くつの中をあちこち照らしています。そしてカガシンの姿に気がつきました。

「おや小さなヤマカガシがいる。この中に住んでいるのかな。どおりで少し生臭い」

「ぼくは生臭くないもん。この洞くつのおいだよ」

その言葉にムツときたカガシンが、思わず言い返しました。驚いた声が返ってきました。

「人間の言葉がわかるのかい？ いや、まさか。頭を打ってどうかしたかな」

「この洞くつの中では誰でも言葉が通じ合うんだ」

カガシンが得意気に言いました。

「本当かい、驚いたな」

声を出しながら、カガシンをしげしげと眺めています。

「これは失礼なことを言ったね、ごめん。そうだな。まずは自己紹介をしよう」

「知っているよ。いつもカエルばかり見ている変わった人間」

カガシンが得意そうに言いました。

「ははは、その通り。すごいな。私の名前は鈴木だけど、みんな、すすさんと呼んでいる」

「ぼくはカガシン」

「よろしく。ここでひとりで暮らしているのかい？」

「お母さんと一緒だったけど、カラスに食べられてしまった」

カガシンの顔が曇ります。

「そうだったのか、つらかったね」

「お母さんは天国で楽しく暮らしているから、つらくなんかない」

カガシンはそう強がって言うてから、

「ねえ、どうしていつもカエルをずっと見つめているの？」

前から気になっていたことを聞きました。

「なるほど、君から見たらそう思うだろうね」

すずさんは、宝満山のカエルたちは、ふもとの池で卵からかえると、なぜか食べ物もあまりない山の頂上に向かってひたすら登りはじめること、それが不思議で、その理由を知りたくて仲間と観察しているのだと伝えました。

「知ってどうなるの？」

カガシンはあきれ顔で言うてから、

「上の方でカエルの家族が待っているか、ゴクラクジョウドがあるからじゃないか、そうお母さんは言うてた」

「そうか、極楽浄土か。カガシンは難しいことを知っているね」

すずさんが感心したので、カガシンはますます得意になりました。

「食べ物もないのにわざわざ山に登るなんてへんだね」

「そうだろう。だからどうしても知りたいんだ」

いつの間にかすすさんとカガシンは親しく話しをしていました。

「おっと、そろそろここから出て戻らないといけないな。お邪魔したね。びっくりさせたおわびにお返しでもできればいいんだけど」

「ぼくも、宝満山の頂上まで行ってみたいな」

「それならお安い御用だ。一緒にカエルを観察しながら、頂上まで連れて行ってあげよう」

ワクワクするカガシンに、すすさんが残念そうに付けくわえました。

「でも、ここから出るとこうしてカガシンと話することができないんだな」

「大丈夫。一度心が通じたらずっと話せるよ」

「そうか、すごいな。こんなすばらしい洞くつが宝満山にあったなんて」

洞くつから外へ出たすすさんは、登山服の大きな胸ポケットにカガシンを入れました。こわこわ外を覗き込むカガシンを確かめながら、山歩きを再開しました。

すすさんはまず、カエルたちが生まれる池へと連れて行きました。

「この池で卵からかえるんだよ。あのとりりとした固まりがカエルの卵で、あちこちで黒く動いているのがオタマジャクシ。あれがカエルの子どもに育つんだよ」

カガシンにとって初めて知ることばかりでした。それから、山の急な斜面を小さなカエルたちが頂上に向かってひたすら登っていく姿を見せました。

「あんなに小さい体で頂上に向かっていくんだ」

すずさんは遠くにかすんで見えている頂上を眩しそうに見つめました。カガシンはカエルたちが気が遠くなるような距離をひたすら登っているのだと初めて知りました。そしてそのカエルを食べてしまっていた自分は、なんてひどいことをしていたのかと悲しくなりました。

「ぼくはとてもかわいそうなことをしていたんだね。これじゃあ、人間に嫌われてもしかたがないな。宝満山の悪者だね」

うなだれるカガシンに、

「それは違うよ。君たちも大切なこの山の一員だ。君たちがいないとカエルたちが増えすぎて困ったことになるんだ」

そう言いながらすずさんは、頂上までの道すがら、カガシンに宝満山に住んでいるいろいろな生き

もののことを教えてくれました。おかげでカガシンは元気を取り戻して、

「よかった。ぼくは悪者じゃないんだね」

とほっとしました。

小さな一歩を重ねて登っていくカエルたちをどんどん追い越して、すずさんはカガシンを頂上まで連れて行くと、人気のない石の上にそっとおろしました。

「すごいなあ。頂上はこんなにきれいだったんだ」

見渡す限り広がった美しい風景にカガシンはうっとり見とれています。人間がわざわざ頂上まで登っていく理由もわかりました。そんなカガシンのことが愛おしくなったすずきさんは、

「人間の世界も見せてあげようか」

そう声をかけ、大喜びしているカガシンを優しくポケットに戻しました。

山を下りて、ふもとですずさんの自動車に乗せてもらったカガシンは、飛ぶように走る車に大興奮してポケットの中でぴんぴんと跳ねています。

すずさんは、近くの大きな神社で車を停めました。境内には人があふれていて、あまりの多さにカガシンはポケットの中でしり込みしました。

「すずさん、人間が増えすぎた時には、だれが増えすぎないようにするの？」

カエルが増えすぎないよう、カガシンたちがいるのだとすずさんに教えてもらったばかりだったの
で、あふれるような人の流れを見てそう聞いたのでした。

「うーん、確かにたくさんいるな。でも人間にはそういうのはいないんだ。カガシンは鋭いことを言
うな、感心したよ」

「カエルのことより、そっちを調べてみればいいのに」

すずさんは笑い出して、カガシンの頭にポンポンとやさしく触れました。かわいいなあ、とすずさ
んは笑みを浮かべ、離婚してから会えなくなった子どもたちが幼ないころ、いろいろと質問してきた
記憶と重なりました。すずさんが宝満山の小さなカエルたちの観察をはじめたのも離婚してからでし
た。

カガシンをもっと喜ばせてあげようと、すずきさんは大きなショッピングモールまで足を運びまし
た。以前よく子供たちを連れてきたおもちゃ売り場がありました。

そこはにぎやかな音や光がきらめいていて、カガシンは夢中になってポケットから体を何度も乗
り出します。そのたびに、すずさんはポケットの中に押し込みながら、ますます子供たちのことと

重なって胸を熱くしました。

そうして涙ぐんでいたすすさんがはっと我に返った時には、カガシンはポケットから抜け出して、ピカピカ光るロボットの前にいて、うれしそうにかま首をもたげていました。

「カガシンー！」

すすさんが声を出して、あわてて隠そうとしましたが、

「きゃー、へび！」

そばでお人形を見ていた女の子たちに気づかれて、大騒ぎになりました。

「毒ヘビだぞ」

「ごめんなさい。でも大丈夫です、何もしません。すぐポケットの中に戻します」

そう言いながらカガシンを戻そうとしましたが、その前に不審者と思われて警備員に取り押さえられてしまいました。すすさんを助けようとして、カガシンが警備員の腕に飛びかかりました。

「カガシン、いけない！」

とっさに手でさえぎったすすさんの手に、カガシンはがぶりと噛みついてしまっていました。

「かみついたぞ。危険だ、みんな離れろ」

騒ぎはさらに大きくなってしまいました。

月明かりの宝満山をそっと登っていく人影がありました。すずさんです。

あれからひらあやまりして、どうにかカガシンを守ったものの、病院で注射を打たれて、『ヘビは二度と人のいるところには連れてこないように』と警察できつくしかられてしまいました。

やっと解放されたすずさんは、疲れ果てていたものの、はやくカガシンを宝満山に戻してあげなければ、とこうして夜の山道を登ってきたのでした。

「ごめんなさい。ついうれしくなつてぼくが飛び出してしまったから」

カガシンはまだめそめそしています。

「いや、逆にすまなかった。喜んでもらおうと思って、あんなところまで連れて行った私のせいだよ」

カガシンはまた泣き出しました。

「極楽浄土のお母さんに笑われるぞ」

やさしい目ですずさんがなぐさめます。月夜の山道をゆっくりと進んで、洞くつまでたどり着いたすずさんは、入り口にそっとカガシンをおろしました。

「さよなら、カガシン。楽しかったよ」

「もう少し一緒にいて」

すずさんはカガシンのそばに座ってくれました。

「また遊んでほしい。ほんとはひとりぼっちで寂しかったんだ」

「そうだな。いつかまた」

ほんとはすずさんもすぐに会いたい気持ちでしたが、カガシンをまた危険な目に合わせてしまう気がして、良い返事をしませんでした。

カガシンが寂しそうな顔をしたのを見て、すずさんは胸が痛みました。カガシンの方も、言うことが聞けなかった自分がいけなかったのだ、とそれ以上は何も言いませんでした。

しばらくして、月明かりが照らす山道をすずさんは帰っていき、その後姿をカガシンは見つめてながら、ひとりぼっちのさびしさをこらえていました。

闇夜がゆっくりと赤く染まり、空が薄墨色から青と変わる中、ようやくカガシンは洞くつの中にもどり、お母さんの抜け殻に寄り添っていましたが、なかなか寝付けませんでした。

そんな中、カガシンはふと思いました。

「もしこの洞くつにすすさんがカエルを連れてこれたら、カエルと話ができるようになるから、ずっと知りたいといっていた頂上に向かう理由も教えてもらえるんじゃないのかな」

そう考えたカガシンはわくわくしました。

「そうだ、すすさんが山に登ってきたときに教えてあげるんだ。大喜びしてくれるぞ。そしたらまたすすさん、いっしょにいてくれるよね」

お母さんの抜け殻にうれしそうに話しかけて、そっと顔をうずめながら目をつぶりました

文章・まえだ つとむ（前田 勉）

昭和三十七年 鹿児島県生まれ、以後、山口、宮崎、福岡と移り、現在鹿児島県在住

これまでの作品 「空っぽのプレゼント」、「クレーンの先には」

「小さなクモが太平洋を渡る」（鹿児島市 子どもたちに聞かせたい創作童話 入選）

「忘れ物グラフ」（アンデルセン童話 入選）

自主出版

詩集「真夜中のつぶやき」、小説「気配」

